

未来社会を見据えた「未来の学び」の創造 ～保幼小中連携を通したキャリア教育の実践～

東京都中野区立緑野小学校長 駒崎 彰 一

I 確かな未来へ To the Solid Future

Society5.0「超スマート社会」である未来社会を見据え、公立学校として「学びのイノベーション」を引き起こす。「学び」だけではなく社会の変革にあった「確かな未来へ」イノベーションを生むことのできる学校を目指しています。

「イノベーション」を引き起こすには、「突破力・実行力」が重要であると言われています。特に「学びのイノベーション」には、これまでの教育活動を踏まえ、「新しい学び」を試行錯誤して創造していく必要があります。その過程で「新たな課題」が数多く出現することが予想されます。良いことはすぐにトコトンやる「実行力」。そして、やり切る「突破力」。この「実行力」「突破力」を引き出すために『“やっちゃえ” MIDORINO』を基本コンセプトとして教育活動を進めています。(緑野小学校 <http://nk-midorino-e.a.la9.jp>)



II キャリア教育の視点からの授業革新

1 クロスカリキュラム・イノベーション

「社会課題の解決という視点が新たな価値を創造する鍵になる。」多くの企業がこのような視点で経営戦略を展開しています。「学びのイノベーション」もこの視点が重要であると捉え、「学びと社会をつなぐ」ことが必要であると考えています。子供たちにとって「良い課題」を設定し、主体的に試行錯誤し、協調して新たな課題を解決する。教科指導の枠を超えた学び、クロスカリキュラムによる「学習者主体の学び」の創造が必要です。

2 子供たちの未来を最大化する

将来、自分で「学び」を広げることのできる力（学び続ける力）を育成すること、そして、子供たちは自分のスキル（資質・能力）で、自分の未来を最大化することができるようにすることが、これからの学校教育に与えられたミッションであると捉えています。

このために、キャリア教育の視点から授業を再構築し、各教科のねらいを達成することはもちろん、実社会につながるスキル（資質・能力）の育成の視点から授業の本質を問い直していくこと。このような実践の積み重ね（試行錯誤）が「授業革新」そして「学びのイノベーション」を引き起こすと考えています。

このような学びを創造するために、3つの視点から学びの創造にアプローチしました。学校図書館・ICTの活用（情報活用能力）、外部人材の活用（問題発見・解決能力）、そして議論する学び（言語能力）です。

（1）学校図書館・ICTの活用（情報活用能力）

スマートフォンやタブレットPCなど情報機器の使いやすさが向上して、子供たちが情報を活用したり発信したりする機会が増大しています。また、IoTやAIなどによってデータを分析した最適な解が導き出される時代となってきました。このような時代は、あらゆる活動において情報を適切に選択・評価して活用することが不可欠な社会。そうした社会において、情報を的確に捉え、何が重要かを主体的に考え、見出した情報を活用しながら他者と協調し、新たな価値の創造に挑んでいけるような「情報活用能力（情報モラルを含む）」の育成に向けた「学び」を学校図書館とICTとの活用により目指しました。



まず、学校図書館の「読書センター」としての機能に加え、「学習センター」、「情報センター」として活用することで「学び」の場を構築しました。学校図書館では書籍で調べたものをインターネットで広げ、インターネットで調べたものを書籍で確認するといった「情報を収集して評価する」といった「学び」を創造していきました。



I C Tの活用については、インターネットでの検索だけではなく、教科書やノートといった単なるツールとしての活用も徹底しました。さらに、「最新のテクノロジーを導入して活用することで社会の課題を解決すること」をコンセプトにさらなる活用を進めています。単に教育用にカスタマイズされた仕組みで授業するのではなく、授業をデザインする中で必要な部分（効果的な部分）に実社会にあるテクノロジーを活用するといったスタイルで「学びの創造」を進めています。

（２）外部人材の活用（問題発見・解決能力）

主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働する重要性などを実感し、問題（課題）を発見・解決することを理解することができるよう、実社会の「ホンモノ」に触れ学ぶことは重要です。地域・家庭・社会と連携・協働して、外部人材を積極的に導入し「ホンモノ」に触れる「学び」の機会を多く取り入れています。外部の人材を導入することで、「学校の常識」という既成概念が「社会の常識」に近付くとともに、教科指導の枠を超えたクロスカリキュラム・イノベーションを容易に可能にすることができます。

（３）議論する学び（言語能力）

子供たち同士、教職員や地域住民・外部人材、先哲の考え方を手掛かりに、個々が考えたこと等の「議論」を通じて協調し、自己の考えを広げ深めることを全ての学びの中心としました。言語活動により他者との多様な考えを融合することで、「協調型問題解決能力」の育成目指した学びです。これにより、ものの見方が広がり、思考が深まっていきました。

３ キャリア教育の視点からの授業デザイン

学校図書館・I C Tの活用（情報活用能力）、外部人材の活用（問題発見・解決能力）、そして議論する学び（言語能力）といった３つの視点に加え、キャリア教育の基礎的・汎用的能力（人間関係形成能力・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）を育成すべき資質・能力として捉え、相互に関連させることで新しい授業をデザインしていきました。

具体的には、以下のマトリックスを活用して、授業デザインを進めました。この手法により、キャリア教育や社会課題の解決という視点から、育成したい資質・能力を明確にした授業デザインが進み、授業の本質を見直すことができます。子供たちにとって「良い課題」を設定し、主体的に試行錯誤させ、協調して課題解決にあたらせる。このような教科指導の枠を超えた、クロスカリキュラムによる授業デザインで「学びのイノベーション」に取り組んでいます。

3つの視点 → 基礎的・汎用的能力 ↓	学校図書館・I C T活用 (情報活用能力)	外部人材の活用 (問題発見・解決能力)	議論する学び (言語能力)
人間関係形成 社会形成能力			
自己理解 自己管理能力			
課題対応能力			
キャリア プランニング能力			